

## ノーベル賞の国際政治学 欧州統合とノーベル平和賞

高崎経済大学 吉武信彦

はじめに

(1) 国際政治学からみたノーベル賞

・ 平和賞は国際政治学の観点から興味深い研究対象。

(a) 歴代受賞者から、20世紀以来の「平和」概念変遷、発展を知ることができる。

(b) ノルウェー・ノーベル委員会の選考過程に注目することで、ノーベル委員会が国際政治に果たしてきた役割とその限界を知ることができる。ノルウェー外交との関連。

(c) 日本とノーベル平和賞とのかかわりにも長い歴史。

(2) 欧州統合とノーベル平和賞

・ 2001年、ノーベル平和賞100周年記念本において、ルンデスタッド・ノーベル研究所所長は、ノーベル平和賞が授与されなかった失敗例として、ガンジーと欧州統合を挙げる。

・ 歴代受賞者の中に、欧州統合に直接関係した者はこれまでにない。

・ 本報告では、欧州統合とノーベル平和賞との関係(特に、第二次世界大戦前)について、試論的に論じたい。

1 ノーベル平和賞の概観

(1) 選考対象

「国家間の友好、常設軍の廃止または削減、平和会議の開催や推進のために最大もしくは最善の活動をした人物」(ノーベルの1895年11月27日付け遺言)

(2) 選考委員

・ 選出主体：ノルウェー国会の選出する5名の委員による「ノルウェー・ノーベル委員会」。1976年末まで「ノルウェー国会ノーベル委員会」が正式名称。

・ 委員：国会の政党勢力を反映。政治家が多い。1937年以後、現職閣僚は除外。1977年以後、現職国会議員も除外。現在、元首相、元閣僚、元党首、元国会議員など。

(3) 推薦資格者

・ 各国国会議員および政府閣僚、国際裁判所判事、大学学長、大学教授、平和研究所・外交政策研究所の所長、ノーベル平和賞受賞者、ノーベル平和賞受賞団体の執行委員、ノルウェー・ノーベル委員会の現職委員・元委員、ノルウェー・ノーベル研究所に任命された元アドバイザー。

(4) 選考過程

- ・前年 9 月： 推薦依頼状の発送
- ・2 月 1 日： 推薦状提出期限
- ・2~3 月： 候補の「ショート・リスト」の準備
- ・3~8 月： アドヴァイザーによる報告書の作成、候補の絞り込み
- ・10 月： 決定、発表
- ・12 月 10 日：授賞式（オスロ）

#### （ 5 ）歴代受賞者

- ・平和賞は、個人、団体でも可能。女性よりも男性が圧倒的に多い。
- ・地域的には、欧州、アメリカ中心から、徐々に南米、アフリカ、アジアに拡大。アジアに関しては、1974 年の佐藤栄作元首相が初。

## 2 欧州統合関係のノーベル平和賞候補

### （ 1 ）主要政治家とノーベル平和賞

- ・欧州の主要政治家の候補、推薦状況。

クーデンホーフ・カレルギー

アデナウアー

チャーチル

シューマン

スパーク

### （ 2 ）クーデンホーフ・カレルギーの事例

- ・これまで判明した範囲では、リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー（1894～1972 年）が欧州統合関係で最もノーベル平和賞に関わりをもつ。
- ・推薦者は、オーストリア、チェコスロヴァキア、ドイツなどの国会議員、閣僚が多い。第二次世界大戦後には、アメリカ人も。
- ・1930 年代にノーベル委員会は彼に大きな関心を示した。

## 3 ノルウェー外交とノーベル平和賞

### （ 1 ）ノルウェー外交とのリンク

- ・ノーベル委員会に注目する必要。第二次世界大戦前のノーベル平和賞の選考過程に関する研究あり。
- ・1920 年代：選出には、ノーベル委員会の委員に擁護者をもつことが必要。ノルウェーの外交政策にとって重要であること。
- ・1930 年代：選出には、1920 年代と同様の傾向。
- ・外交政策との関連の背景

### （ 2 ）クーデンホーフ・カレルギーに関する評価

- ・ノーベル委員会報告書の作成者
- ・報告書の分析の特徴

(a) クーデンホーフ・カレルギーについて、生い立ちなどにも詳しい。その後の活動を追加し、1930年代の活動をフォロー。

(b) パン・ヨーロッパ構想について、詳細に説明。その際、パン・ヨーロッパ構想それのみを紹介するのではなく、国際関係とのかかわりを重視し、反対論なども明記する。たとえば、国際連盟との関係、イギリスとの関係、ソ連との関係など。

(c) 受賞の可否に関する明確な評価はしていない。

・ノーベル委員会のクーデンホーフ・カレルギー評価

議事録がなく、詳細は不明。しかし、報告書の分析からみると、評価は高いとはいえない。

おわりに

(1) 第二次世界大戦前の欧州統合とノーベル平和賞との関わりについて、クーデンホーフ・カレルギーを中心に整理。第二次世界大戦後は、今後の課題。

(2) ノルウェーがE E C・E C加盟を求めた1960年代以降は、ノルウェー国内で欧州統合問題が政治問題化。そうした中でノーベル委員会が欧州統合をいかに考えていたかは、特に興味深いテーマ。しかし、現在の史料の解禁状況からは、将来の研究課題。

主要参考文献（拙稿のみ）

拙稿「欧州統合の中の北欧諸国」(田中俊郎、小久保康之、鶴岡路人編『E Uの国際政治  
域内政治秩序と対外関係の動態』慶應義塾大学出版会、2007年)。

拙稿「フロンティアからみた北欧・E U関係 その歴史的展開と可能性」(山内進編  
『フロンティアのヨーロッパ』国際書院、2008年)。

拙稿「ノーベル賞の国際政治学 ノーベル平和賞と日本：序説」(『地域政策研究』  
第12巻第4号、2010年3月)。

拙稿「ノーベル賞の国際政治学 ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補  
補」(『地域政策研究』第13巻第2・3号、近刊)。